

## アイヌ語の助動詞 *nisa* の用法についての一考察

吉川 佳見

キーワード: アイヌ語、助動詞、アスペクト、完了、パーフェクト

### 1. はじめに

アイヌ語の助動詞 *nisa* (以下、*nisa*) は過去や完了をあらわす形式として各方面で記述されているが、実例は少なく、同じく過去・完了をあらわすとされる助動詞 *a* との意味の違いもはっきりとしていない。本稿では *a* と比較しつつ、*nisa* の用法について考察する。

### 2. 先行研究と問題点

*nisa* については、田村(福田)(1960)、浅井(1969)、久保寺(1977)、バチラー(1981)、久保寺編(1992)、川村・太田(2005)、佐藤(2008)などが記述しているが、いずれも内容にほぼ差は無く、現在ではもう済んでしまっている出来事をあらわす際に用いられる助動詞である、というのが共通の見解である。また、浅井(1969)の用例では *nisa* が未来完了をあらわす機能をもつこともうかがえる。

- ・最近まで行われていなかった行動が今しがた行われて、今はもうすんでしまっていること  
《もう...してしまった》(田村(福田)1960: 349) <sup>1</sup>
- ・<してしまう>事柄が終了することを表わす。 *omán nisá nánkor* <彼は行ってしまおうだろう> (君が帰るまでに)。(浅井 1969: 788) <sup>2</sup>
- ・完了態助詞「…してしまつた」「すでに…した」(久保寺 1977: 720)
- ・過去ヲ示ス助動詞. *aux. v.* This word is used after verbs to indicate past time. (バチラー1981: 323)
- ・已然態助辞 *perfective aspect* (動作・状態がすんで無くなっている時) (久保寺編 1992: 172)
- ・助動詞(事柄が完了することを示し) ~ (し) てしまふ (空知、近文、名寄) "Usa e=kan-nisa ruwe?" 「いろいろお前作つてしまつたかい?」(川村・太田 2005: 125) <sup>3</sup>
- ・「~した、~してしまつた」(佐藤 2008: 84)

<sup>1</sup> 同様の記述は田村(1988)にもあるが、内容にほぼ差はないため今回は割愛する。

<sup>2</sup> *oman nisa nankor*  
行く NISA だろう 「彼は行ってしまおうだろう」  
原典の「á」はアクセントを示す。本稿ではアクセント記号は表記しない。

<sup>3</sup> *usa e=kar nisa ruwe?*  
いろいろ 2SG.A=~を作る NISA こと 「いろいろお前作つてしまつたかい?」  
原典「*e=kan-nisa*」の *kan* は *n* 音の前で *kar* の *r* 音が変化したもの。本稿では音変化は表記しない。

アイヌ語には **nisa** と類似した意味をあらわす助動詞 **a** (以下、**a**) があり、**a** も既に済んでしまった出来事を述べるときに用いられる形式だが、その違いについて触れた研究は無い。ちなみに知里(1973[1942] : 567)は、「**nisa=a** …た」とのみ記しているが、その根拠となるような例は挙がっていない。本稿では **a** と比較しながら **nisa** の用例を検討する。

### 3. 用例検討

以下、グロスと下線は本稿筆者による。和訳は、特に記号がない場合は原典通りであり、<>付きの和訳は本稿筆者によるものである。「/」は韻文中の節境界である。

(1)(2)は田村(福田)(1960)、(3)は田村(1988)による。田村(福田)(1960)は **nisa** が「最近まで行われていなかった行動が今しがた行われて、今はもうすんでしまっていること(田村 1960 : 349)」をあらわす形式であると述べており、以下の 3 例の和訳にも「今、その行動がおこなわれた」ということが反映されている。

(1) **ci nisa.**

焼ける NISA

やけてしまった (魚がやけたからさあおいで)

(田村(福田)1960 : 349、一部表記変更)

(2) **tap uhunak ku=nuye nisa.**

今 この頃 1SG.A=～を書く NISA

今しがた書きました

(田村(福田)1960 : 349、一部表記変更)

(3) **ku=ku nisa.**

1SG.A=～を飲む NISA

さっきまで飲んでなかったが、つい今しがた飲んだ。

(田村 1988 : 43、一部表記変更)

**a** も既に終結した事態について述べることができるが、**a** は「近過去、遠過去の区別はない(佐藤 2007 : 12)」形式であり、(4)のような状況も、(5)のような状況もあらわすことができる。一方 **nisa** は「今しがた行なわれた(田村 1960 : 349)」というように、事態の終結点は発話時現在にある。まず、この点において **nisa** と **a** とは異なっている。

また、統語的にみれば、**a** が接続助詞や名詞句、終助詞を後部に伴うのが一般的である<sup>4</sup>のに対し、**nisa** は後部要素を伴わずに文末位置に置くことができるという特徴がある。例えば(4)(5)の **a** はいずれも終助詞 **wa** を伴っているが、先に挙げた(1)(2)(3)は **nisa** で文が終

---

<sup>4</sup> 佐藤(2006 : 64)参照。

止している。

- (4) esir ka upas as kor an siri terebi ani ku=nukar a wa. (近過去)

さっきも 雪 降るて いる.SG 様子テレビで 1SG.A=～を見る た FIN

さっきも雪が降っているのをテレビで私は見たよ。

(佐藤 2007 : 12、一部表記変更)

- (5) toop teeta wano sikot ta aynu okay pe ne a wa. (遠過去)

ずっと昔 から 支笏 に アイヌ いる.PL もの COP た FIN

ずっと昔から支笏にアイヌがいたものであったよ。

(佐藤 2007 : 12、一部表記変更)

a は後部に接続助詞（またはそれ相当の形式名詞）を伴って逆接的に後文脈とつながることがしばしばあるが、管見の限り nisa にはそうした用法は無い。以下の例(6)(7)を参照されたい。(6)は a korka 「～たけれど」、(7)は awa<sup>5</sup> 「～が」というように、a を一要素に含む逆接表現となっている。(6)では、「(自分が) お前に聞かせなかった」という事態は、発話時現在から見れば既に過去のことであり、発話時現在は「e=nu nisa (汝は聴いてしまった)」という状況にある。(7)も同様で、「内国の孫を敵にしまった」という状況変化がある。

- (6) somo a=e=nure / ruwe ne a korka /

NEG 4.A=2.A=～に～を聞かせる / こと COP た けれど /

e=nu **nisa** hawe / ne yakun

2SG.A=～を聞く NISA 話 / COP ならば

汝に聴かせず／今までありしが、／汝すでに聴きて／しまひたるならば

(久保寺 1977 : 490-491)

- (7) huskotoywano / a=more mosir / Nisimak kotan ne awa

昔から / 4.A=～を静める 国 / ニシマク 村 COP したが

tane anakne / yaunkur nitpo koyaytekani **nisa**

今 は / 内国 孫 ～を敵にする? NISA

昔から／我が静かにしていた国が／ニシマク村であったのに／

今は／内国の孫を／敵にしまった。

(金成 1965 : 214、一部表記変更)

<sup>5</sup> 元々は助動詞 a と接続助詞 wa 「～して」から成る。awa で一つの接続助詞とみなされることが多い。

a は過去や完了(perfect)をあらわすというのが通説であるが、拙稿(2020)<sup>6</sup>では a が現在とは断絶した過去を示すという点などから、a は perfect ではなくアスペクト的にみれば perfective ではないかと提案した<sup>7</sup>。例えば(8)のような例については、本稿筆者は、「雪がなかった」という事態は「雪が降っている」という発話時現在の事態と対照にあり、現在からは断絶した過去にあたると思った。これを踏まえて今回 nisa を見てみると、先に挙げた(6)(7)の場合は過去の事態と現在の事態が関係して繋がっている（過去が現在に影響を及ぼしている）ため perfect である。

(8) esir pak anakne upas ka isam a p

さっきまでは雪もなかったのだが

tane upas as kor an wa.

今雪降っている.SG FIN

さっきまでは雪もなかったのに、今雪が降っているよ。

(佐藤 2008 : 184)

さらに nisa には(9)のように未来完了(future perfect)としての用法もあるようである。管見の限り、a にはこの用法はない。

(9) oman nisa nankor

行く NISA だろう

彼は行ってしまおうだろう（君が帰るまでに）。

(浅井 1969 : 788)

動詞の語彙的アスペクトに関しては、a は動作動詞、変化動詞ともに共起する<sup>8</sup>が、nisa と共起する動詞にも特にその制限はみられず、ku 「～を飲む」（例 3）や ipe 「食べる（食事する）」（例 10）といった動作動詞、また、ek 「来る」（例 11）や iwanke 「元気になる」（例 12）といった変化動詞の、どちらとも共起しうる。また、コピュラ動詞 ne （例 13）とも共起する。ne は「である」のほかに「～になる」という変化もあらわす動詞であり、変化動詞的な性質を持つ。<sup>9</sup>

<sup>6</sup> 吉川佳見(2020)「アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性」『北方言語研究』10, 日本北方言語学会（2020年2月現在未公開、同年3月刊行予定）

<sup>7</sup> 本稿において、perfective は「内的な時間構成とは無関係に、ひとまとまりのものとしてとらえられる場面をさしめず（コムリー1988[1976] : 25）」もの、perfect は「過去の出来事の結果が現在にのこっていることをいいあらわす（コムリー1988[1976] : 25）」ものとして定義する。

<sup>8</sup> ここでの「動作動詞」「変化動詞」の区分は中川(1981)、佐藤(2006)を参考とした。基本的には、動作動詞は kor an 構文を取って動作の継続をあらわす動詞であり、変化動詞は wa an 構文を取って変化の結果の継続をあらわす動詞である。日本語標準語では kor an はテイル形、wa an はテイル／テアル形で訳される。

<sup>9</sup> アイヌ語では一般に「ある状態である」と「その状態になる」とは、表現の上で区別されない

(3 再掲) *ku=ku nisa.*

1SG.A=～を飲む NISA

さっきまで飲んでなかったが、つい今しがた飲んだ。

(田村 1988 : 43、一部表記変更)

(10) *ku=ipe nisa*

1SG.S=食べる NISA

私は食べ終わった。

(萱野 1996 : 342、表記変更)

(11) *sonno Ponyaumpe / ek nisa hawehe an /*

本当に ポンヤウンペ / 来る NISA 話 ある.SG /

*tane neyta an / ruwe ta an ?*

今 どこに ある.SG / こと EMP ある.SG

本当にポンヤウンペが／来たという話がある。／今どこにいる／のだ？

(金成 1965 : 208、一部表記変更)

(12) *ne utar nesko inaw kar wa kinasut kamuy or ta*

その人々 クルミの木 イナウ ～を作る て 蛇 神 ところに

*kore hine inonnoytak ki ruwe ne ayke*

～に～を与える て 祈り ～をすること COP すると

*nani ne aynu iwanke nisa ruwe ne*

すぐ その 人間 元気になる NISA こと COP

“the people made fetiches of walnut, and, offering them to the snake made prayers; and then the man got well.”

<その人々はクルミの木のイナウを作り、蛇の神に捧げて祈ると、すぐにその人は元気になった。>

(Batchelor 1924 : 6、一部表記変更)

(13) *ne siwentep tura turano umurek kur ne nisa ruwe ne awa*

その女性 ～を連れて一緒に 夫婦 人 COP NISA こと COP たが

*poronno poho hetukure nisa ruwe ne.*

たくさん 子供 ～を生む NISA こと COP

(中川・中本 2004 : 41)。たとえば存在動詞 *an* 「ある、いる」は「なる」という意味を持ち、*siknu* 「生きる」は「生き返る」という意味も持っている。

tanpe kusu ne awente kotan suy inne kotan ne **nisa** ruwe ne.  
それ ので その 壊れる 村 また にぎわった 村 COP NISA こと COP

“( he and ) the woman became husband and wife. A great many children were born to them and so it came to pass that devastated region had once more many villages.”

< (彼と) その女性は夫婦になり、多くの子をもうけた。なので、その荒れた村はまた栄えた村になった。 >

(Batchelor 1924 : 102)

**nisa** と **a** が共起する場合 (例 14) もあるが、訳語を見る限り大きな意味の差異は読み取れない。両者は事態の終結をあらわす点では意味が共通しており、ここではその共通の意味があらわれているとみてよいだろう。(14)は物語を語り終わった後、語り手が聞き手に対していった言葉である。(15)は動詞 **sonkoye** 「伝言を伝える」に **nisa** が後続しており、こちらも(14)同様「言う」という行動を終えた場面である。(16)は **ipe** 「食べる」に **nisa** と **a** が後続しており、(17)は **a** のみであるが、こちらも大きな意味の差異は読み取れない。

(14) **a=ye**      **nisa** a na  
4.A=～を言う NISA た FIN  
私は言い終わったよ。

(萱野 1998 : 80、表記変更)

(15) **sonkoye**      **nisa** ike      /      **yairayke=an** wa  
伝言を伝える NISA たところ / 感謝する=4.S て  
<伝言を伝え終わったところ、私は感謝して>

(四宅 1979 : 318、一部表記変更)

(16) **tane** ku=**ipe**      **nisa** a wa.  
もう 1SG.S=食べる NISA た FIN  
もう私は食べてしまったよ<sup>10</sup>

(佐藤 2008 : 84、一部表記変更)

(17) **tane** ku=**ipe**      a wa.  
今 1SG.S=食べる た FIN

<sup>10</sup> **tane** は文脈によって、「今」「今や」「今すぐ」「もう」などと訳されるのだが、佐藤(2008 : 185)は、**tane** は「今現在」を軸としつつも、「今より少し前」「今より少し後」を含めた比較的広い「今」を意味すると指摘している。

今（さっき）私は食事をしたよ

（佐藤 2008 : 185）

*nisa* が助動詞 *aan*<sup>11</sup> と共起する場合（例 18）もある。*aan* は、既に起こった事態に対して、その事態の生起時には分からなかったことが、発話時現在において判明したことをあらわすときに用いられる形式<sup>12</sup>である。言い換えれば、何らかの痕跡にもとづいて過去を推測する意味機能をもつが、(18)においてもその意味があらわれている。原典注釈には「御飯は既に炊いてあった（久保寺 1977 : 649）」とあり、この場面では、主人公が家に入ると既に食事の用意がしてあった、すなわち料理をするという行動の痕跡が残っていた、ということになる。*nisa* は「今しがた終えた」という近過去をあらわすのだとすれば、ここでは料理をし終えてからそれほど時間が経ってないということが表現されているのかもしれない。

(18) *suke=an nisa aan*<sup>13</sup> / *ipe=an kusu ne akusu*

料理する=4.S NISA た / 食事する=4.S ので COP すると

御飯は炊いてあって／食事にかかろうとしていたところだったので

（久保寺 1977 : 207）

#### 4. まとめ

助動詞 *nisa* を *a* と比較した場合、以下のことが確認された。

- ・ *a* は近過去と遠過去ともにあらわすが、*nisa* は近過去をあらわす傾向にある。
- ・ *a* は現在と断絶した過去をあらわしうるのに対し、*nisa* は過去の場面が現在にまで及ぶ完了(perfect)をあらわす。また、未来完了(future perfect)をあらわすこともある。
- ・ 共起する動詞の語彙的アスペクトには、どちらも特に制限はみられない。
- ・ *a* が接続助詞や名詞句、終助詞を後部に伴うのが一般的であるのに対し、*nisa* は後部要素を伴わずに文末位置にくることが多い。

#### 略号

1, 2, 4 : 人称(三人称はゼロ表示。四人称は、包括的一人称複数、二人称敬称、不定人称、物語中の叙述者の人称等の用法を持つ。), = : 人称接辞境界, S : 自動詞主語, A : 他動詞主語, SG : 単数, PL : 複数, COP : コピュラ動詞, EMP : 強調, NEG : 否定, FIN : 終助詞

<sup>11</sup> *aan* は助動詞 *a* と存在動詞 *an* 「ある、いる、なる」から成ると推測されている。

<sup>12</sup> *aan* については金田一(1993 [1931])、知里(1974[1936])、田村(1988,1996)、中川(1995)、萱野(1996)等を参照。また、拙稿(2018,2020)においては *aan* が間接証拠性をしめしうることを指摘している。

<sup>13</sup> 久保寺(1977)は *aan* を「完了存在態」とし、「完了存在態は、或る動作が既に完了して、その結果が今なお残っていることをあらわす (p649)」と説明している。

## 参考文献

- 浅井亨(1969)「アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言文法の概略—」アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』, pp.771-800, 第一法規出版.
- 川村兼一監修・太田満執筆 (2005)『旭川アイヌ語辞典』アイヌ語研究所.
- 金成まつ(1965)『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』5, 三省堂.
- 金田一京助 (1993 [1931])「アイヌ語学講義」『金田一京助全集 アイヌ語 I』5, pp.133-366, 三省堂.
- コムリー,バーナード(1988)『アスペクト』山田小枝訳,むぎ書房 [Comrie,B. 1976. Aspect. Cambridge University Press.]
- 萱野茂(1996)『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂.
- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成』4, 平凡社.
- 久保寺逸彦(1977)『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店.
- 久保寺逸彦編(1992)『アイヌ語・日本語辞典稿—久保寺逸彦アイヌ語収録ノート調査報告書』(北海道教育庁生涯学習部文化課編), 北海道教育委員会.
- 佐藤知己(2006)「アイヌ語千歳方言のアスペクト—kor an、wa an を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12, pp.43-67, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 佐藤知己(2008)『アイヌ語文法の基礎』大学書林.
- 四宅ヤエ(1979)「かけすの使者」浅井亨編『日本の民話 1 北海道』, pp.309-318,ぎょうせい.
- 田村(福田)すず子(1960)「アイヌ語沙流方言の助動詞—アイヌ語の助詞についての報告その1—」『季刊民族学研究』24(4), pp.343-354.
- 田村すず子(1988)「アイヌ語」亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編『言語学大辞典』1, pp.6-94, 三省堂.
- 知里真志保(1973[1942])「アイヌ語法研究」『知里真志保著作集』3, pp.457-586, 平凡社.
- 知里真志保(1974[1936])「アイヌ語法概説」『知里真志保著作集』4, pp.3-197, 平凡社.
- 中川裕(1981)「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」『言語学演習 '81』, pp.131-141, 東京大学文学部言語学研究室.
- 中川裕(1995)『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.
- 中川裕・中本ムツ子(2004)『CD エクスプレス アイヌ語』白水社.
- バチラー,ジョン(1981)『アイヌ・英・和辞典』第4版, 岩波書店.
- 北海道教育委員会(1998)『トゥイタク (昔語り)』2, 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編(1998)『八重九郎の伝承』6, 北海道文化財保護協会.
- 吉川佳見(2018)「アイヌ語の助動詞 aan と証拠性」『アイヌ語の文献学的研究 (3)』 pp.3-18, 千葉大学大学院人文公共学府.



吉川佳見(2020)「アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性」『北方言語研究』10,  
日本北方言語学会. (近日公刊)

Batchelor, John.(1924) *Uwepekere, or, Ainu Fireside Stories*. Kyobunkan.

(よしかわ よしみ・千葉大学人文社会科学研究所)